



食欲の秋に 食 を考える

落ち葉が秋の深まりを感じさせくれる今日この頃、皆さまいかがお過ごしでしょうか。今回のテーマは「食」です。食欲の秋に「食」について考えてみました。

食育ってな～に？

食育とは、健康で豊かな食生活や食習慣を送る力を育てるとともに、食材やその生産・流通に携わる人達を知り、食べ物の大切さやそれを育む自然の素晴らしさを学ぶこととされています。これまで日本では「食育」といえば、栄養バランスや食事のマナーの話だけで、食材の生産・流通の過程やそれを育む自然の素晴らしさについて触れてきませんでした。しかし、BSEや鳥インフルエンザ等で食の安全についての関心が高まり、それと共に「食育」をより広い視点で考え、学んでいこうとする機運が高まっています。

具体的に「食育」を行っている様子を、ある小学5年生の社会科の授業を紹介しましょう。

★ 1時間目 「日本の食糧が輸入に頼っている現状について考える」

「今から四十年前と現代の食卓の写真を見てもらいますので、比べてその違いを上げて下さい」。と尋ねると、「肉類が多くなって！」「品数が増えてる！」「今は色がきれいな！」と生徒は答えた。どの子どもも食生活が豊かになっていることに気づいたようだ。「では今と昔とどちらが良い？」と聞くと、ほぼ全員が「今の方が良い！」と答えた。「では、このグラフを見てください」と食料輸入量を示したグラフを見せる。生徒は「わー！こんなに輸入してるなんて知らなかった。」と驚いた様子だった。さらに生徒からは、「輸入品が多いのは安いから！」「日本で作られたものが高いのは作る人が減ってきた事と関係があるのかなあ？」「お母さんが輸入品は安全性に問題がある物があるって言ってた！」と、いった様々な面からの課題へのアプローチが見られた。生活上なじみの薄い「農業の話」に比べ、買い物の経験などから「消費者」としての関心は高いように感じた。「それでは、自分の家ではどのぐらいの輸入品を利用しているのか調べてくるように」として1時間目を終えた。

★ 2時間目 「輸入に頼っている現状の問題点について考える」

子どもたちは、自分たちの食生活が思った以上に外国産の食べ物が口に入っている事に驚いていた。「日本産のお肉でも飼料は輸入だよ」というとさらにショックを受けていた。「なんでこんな輸入ばかりなんだ？」「こんなに輸入に頼っていて大丈夫なの？」「外国から安いものが入ってくるから日本の農家の物が売れなくなるってお母さんが言ってたよ」「外国で作られたものには日本で使われていない薬が使われているものがあるって心配だってお母さんが言ってたよ」と次々に現状を心配する意見を口にした。「じゃあ、今より自給率の高かった40年前の食卓に戻れる？」と聞くと「それはいやだ！」という。

ここで、今の『豊かな食卓』＝『食料輸入過多』が結びついた感じた。

(以下省略)



ここでは食料生産と消費者教育を結びつけた授業でしたが、その中で農業を考え、社会を考える子どもたちの姿が見えます。ここからさらに、環境問題や人権の問題、外交の問題、健康の問題、と毎日の食卓がつながっていることを学び、食を通して考えることができる本当に幅の広いテーマです。ゆえに、食育は、子どもたちが考える力を養う上でも良いテーマであると言えるのではないのでしょうか。

今、ゆとり教育の見直し中で「総合学習の時間なども無くし、国語や算数に戻そう」という議論がありますが、上記の様な授業ができていればそんな話にはならなかったのかもしれない。